

論壇

惠泉女学園
大学学長

木村 利人



創世記とヨブ記 からの洞察

聖書の教えの中に、核の開
発を生み出すような本質があ
ったのかどうか。聖書はそれ
を予見していたのか。人類が
核の脅威にさらされている時
に聖書は何か有効性のある答
えを出しているのだろうか。
これらの三つの質問は、原子

力資料情報室を主宰し、日本
の核エネルギー政策に極めて
批判的であった故・高木仁三
郎氏によってわたしたちに投
げかけられた問いであった。
富坂キリスト教センターで
1988年9月に行われた
「自然科学技術・人間研究会
」において、これらの鋭い問題
提起をされた時の高木仁三郎
氏の真剣な眼差しは今もほ

きりと印象に残っている。
高木氏の報告は、旧約聖書
の創世記とヨブ記を深く読み
込んだ説得力のある内容で、
結論的に「聖書(キリスト
教)は核につながるある種の
必然性を持っていたかもしれ
ない」と述べられた。しか
し、引き続いて聖書は「人間
が荒々しく自然に襲いかか
り、核兵器や環境破壊や生命

操作によって自らの首をしめ
かねない存在であることにつ
いて、少なくとも洞察と警
告を含んでいた」とし、キリ
スト教会とキリスト者たちは
十分にそのメッセージを汲み
取り得なかったように思えて

聖書は核を予見したか

ならない」と言われた。
この厳しい預言者的な洞察
に富んだ指摘にふれて、わた
したちは身の引き締まる思い
がした。聖書のメッセージを
正しく受け止め、未来に向け
て「脱原発」への具体的な展
望に取り組むべきことを今改
めて教えられている。

「自己規制のメカニズムを
欠いた科学技術の、資本や国
中甸に米・マサチューセツ
この号は、1979年7月

よみがえる32年前 の提言

前の1979年11月号の「福
音と世界」誌にわたしが執筆
した「生命操作時代の衝撃―
バイオエシックスの挑戦」の
中の一節である。

など科学技術専門家、生命科
学者、キリスト教神学・倫理
学者、仏教・イスラムの宗教
家、政策担当官、政治家、経
済学者など、約1千人の参加
者があった。同会議での全体
討議の議題をめぐっては、予
想外の展開があった。それ
は、主催のWCC側での企画
原案にはなかった二つの重要
な決定が、参加者のイニシア
ティブで本会議場に提案さ
れ、採決されたからであっ
た。一つは「核軍縮」につい
てのアピールであり、他は
『原子力発電の3年間モラト
リウム』の決議であった。

筆者は会議の分科会で、地
域住民の知る権利に基づいた
コミュニティ的発想による
先端科学技術とインフォーム
ドコンセントの展開を提言
し、「仮に災害が生じた場合、
最も被害をこうむるのは一般
市民なのだから、あらかじめ
その危険度・範囲・内容につ
いて、あらゆる情報が制限な
しで一般市民に与えられてい
て当然である」と発言した。
今こそ、わたしたちは「い
のちを選ぶ(申命記30・19)」
キリスト者として、希望ある
未来に向けた「脱原発」世論
形成への責任を主にあって担
っていくべきである。

筆者は会議の分科会で、地
域住民の知る権利に基づいた
コミュニティ的発想による
先端科学技術とインフォーム
ドコンセントの展開を提言
し、「仮に災害が生じた場合、
最も被害をこうむるのは一般
市民なのだから、あらかじめ
その危険度・範囲・内容につ
いて、あらゆる情報が制限な
しで一般市民に与えられてい
て当然である」と発言した。
今こそ、わたしたちは「い
のちを選ぶ(申命記30・19)」
キリスト者として、希望ある
未来に向けた「脱原発」世論
形成への責任を主にあって担
っていくべきである。

(きむら・りひと)